

変わったところでは、英国公使館の通訳生だったアーネストサトウは、
自著「一外交官の見た明治維新」の中で、西郷の印象を次のように語っている。

「前からもしやと疑っていたのだが、西郷は、
1865年(慶応元年)11月に島津佐仲と称して
私に紹介された男と同一人物であることがわかった。

そこで、私が偽名のことを言うと、西郷は大笑いした。
型の如く挨拶を交わした後も、この人物は甚だ感じが鈍そうで、
一向に話をしようとせず、私も些か持て余した。

しかし、**黒ダイヤのように光る大きな目玉と、
しゃべる時の微笑には何とも言いしれぬ親しみがあつた。」**

**西郷の、他者との面談、交渉時における際だった特徴は
「沈黙を怖がらない」という点であろう。**

維新の一つの山場である薩長秘密軍事同盟時の桂小五郎との交渉時といい、
上野彰義隊討伐時、薩軍の軍兵配置を巡る大村益次郎との討論時といい、
通常の人間では気の遠くなるほどの沈黙を続けている。

この頃の西郷には、若い時分、橋本左内に
「悲憤慷慨の徒」と評された面影は、跡形もない。

こうした西郷を中心とした討幕維新の仕上げの生々しい部分を、少々記述したい。

1867年(慶応3年)10月、幕府対薩長の力関係を考えた末、
賊の汚名を着るのを恐れた徳川慶喜は、
先手を打って朝廷に対し大政を奉還してしまった。

妙手であった。

西郷ら討幕派は、振り上げたげんこつの行き場を失ってしまうのである。

このままでは、実質慶喜主導の公武合体政権になってしまう。

同年12月、西郷らは武力を背景にして強引な手にでる。
小御所会議における王政復古の大号令である。

ここには徳川慶喜は出席させていない。

主な出席者は岩倉具視他有力公卿、松平春嶽、山内容堂、伊達宗城、島津茂久。

討幕派公卿岩倉は、この会議において徳川慶喜の有する官位と土地の全ての返上を要求している。

これに対し、土佐の山内容堂は、
慶喜を会議に加えず一方的に徳川家の所領を召し上げるのは理にかなわぬ、
と幕府側に立った論陣を張っている。

正論であった。